

財木・金鑄場遺跡

1977

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

序

文化の向上と、新しい時代の要請に対応し、住民の日常生活の伸長を企てるために、地域開発は絶対的な方策とされ、各市町村は積極的にこれに取り組んでまいりました。これに反して、埋蔵文化財は現状保存が最も望ましい姿であります。一度、発掘されれば、再び、元のような状況には戻らず、それは消滅を意味します。このようななかで、地域開発と文化財保護は、しばしば対立する事態が発生する事が多く、行政上、その判断に迷うことがあります。

財木遺跡は市内の多数の遺跡の中でも、縄文後期に属する重要な遺跡として、近年、広く考古学界に有名なものとなっていました。従って、これが開発の波に押し寄せられて、その発掘するにあたり、最も、学術的な発掘調査が、地元考古学者より強固な要望があったために、伊那市教育委員会では、いろいろの方面から考えて調査団長に玉川大学助教授上川名昭先生に依頼しましたところ、先生は快よく受理してくれました。

調査は寒さのきびしき11月下旬から、12月上旬にかけて行なわれ、多くの貴重な成果を収めることができました。

終始、発掘及び報告書の任に当られた玉川大学助教授上川名昭先生、また、発掘調査の面でいろいろ御指導下さいました、関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一同に深甚なる教意と感謝の誠を捧げたいと思います。

昭和52年3月

伊那市教育委員会

教育長 伊沢 一雄

例　　言

- I 本報告書は、昭和51年11月20日から12月9日まで送水管工事にともなう
財木遺跡の行政発掘である。
- II 本書の全測図は、小野征之・今井正司が担当し、トレスは上川名昭がこれに
あたった。
- III 写真撮影は、すべて上川名昭が担当した。
- IV グリッドのセクションは山本信男が担当し、村田みどり・西村節子・馬場昭
男・浅野明子・三島誠・大槻清隆・東保雄が協力したものである。
- V 塙遺構の実測は、山本信男・浅野明子がこれにあたり、トレスは上川名昭
がこれにあたった。
- VI 図版作製、実測図のトレス、土器拓影、土器の写真はすべて上川名昭が担当
し、山本信男が協力したものである。
- VII 本書の執筆編集は、すべて上川名昭が担当したものである。
- VIII 本書には、中期縄文初頭の塙遺構と、採集した後期縄文土器、少量ながら
中期縄文土器を納めてある。
- IX 上伊那郡内の後期縄文遺跡の分布図を、小池政美が作製し、上川名昭がまと
めた。

目 次

序	
I 財木遺跡の概要	
1. 財木遺跡の自然環境と付近の遺跡の分布	1
2. 遺跡の発見	1
II 調査契機とその経過	
1. 発掘契機	4
2. 調査日誌	4
III 遺構と遺物	
1. 層位	12
2. 埋甃遺構	17
3. 出土遺物	18
IV 総括	
おわりに	28

Figures

Fig. 1 財木遺跡の地形図と付近の遺跡	2
Fig. 2 財木遺跡のグリッド設定図	13
Fig. 3 Aセクション図	14
Fig. 4 Bセクション図	14
Fig. 5 Cセクション図	15
Fig. 6 Dセクション図	14
Fig. 7 Eセクション図	15
Fig. 8 Fセクション図	16
Fig. 9 埋甃遺構実測図	17
Fig. 12 注口部の実測図	18
Fig. 10 土器拓影Ⅰ	19
Fig. 11 土器拓影Ⅱ	20
Fig. 13 土器拓影Ⅲ	22
Fig. 14 土器拓影Ⅳ	23
Fig. 15 土器拓影Ⅴ	24
Fig. 16 埋甃土器と凹石の実測図	25
Fig. 17 上伊那郡における後期繩文文化の分布図	26

PLATES

P. L. 1	土器破片	29
P. L. 2	土器破片	30
P. L. 3	土器破片	31
P. L. 4	土器破片	32
P. L. 5	土器破片	33
P. L. 6	土器破片	34
P. L. 7	埋甕土器と凹石	35
P. L. 8	E-4区のセクション、E-6区のセクション	36
P. L. 9	南側よりB地区グリッド全景とB地区グリッド設定	37
P. L. 10	A地区、B地区発掘風景	38
P. L. 11	E-3区の発掘状況とW-4区西拡張部	39
P. L. 12	埋甕遺構	40
P. L. 13	E-3区、E-4区のグリッド全貌及びE-2区の埋甕とE-3区の発掘状況	41
P. L. 14	W-1区のセクション実測とW-4区の西拡張部の発掘状況	42
P. L. 15	Bセクションの実測と記念撮影	43

I 財木遺跡の概要

1 財木遺跡の自然環境と付近の遺跡の分布

諏訪湖に端を発し、辰野付近で南流する天竜川は長大な伊那盆地を発達させ、飯田市の南に天竜峡の景勝の地をつくり、静岡県の浜松市の東側で太平洋に注いでいる。

伊那谷は、東に赤石山脈の連山、西には木曾山脈が屏風のごとく立ち連なり、その中間に南北80kmにも及び、その流域に地質学的にも代表的な段丘をとどめ、考古学的にも宝庫ともいべき盆地を形成している。

天竜川はその流域に岡谷・辰野・伊那・駒ヶ根・飯田の各都市を発達させ、特に伊那市付近では東西20kmほどの広がりを見せ伊那谷の中で一番広大な面積を持っている。伊那市の中心街より北西に2kmほど登り、経ヶ岳東山麓、標高900mほどの扇状地として開けた伊那市西箕輪羽広字財木3028-1に財木遺跡が在る。現状は畑地で西側が高く東南部が低い傾斜地である。遺跡の近くには古寺として名高い中仙寺があり、最近伊那市の考古資料館も建てられ、参詣人と資料館の見学者が大勢集まるようになった。

遺跡の背後は木曾山脈の東山麓に接し、北・東・南の三方は扇状地が天竜川近くまで広がり、山野をかけめぐる動物の捕獲も容易であったろうし、原野に繁茂する食用植物も豊富で採集経済の盛んであった縄文時代にあっては最適な生活の場であったことは想像に難くない。

発掘地点のすぐ北側には幅5mの仲仙寺への参道が東西に走り、西側は幅2mの農道が南北に通じている。南側は一段と低くなっており、幅5mの農道となっているが、古くは河川による谷底をつくっていたものと考えられる。

伊那市西部地区は遺跡の密集地帯であり、財木遺跡をはじめ、中期縄文の遺跡として伊那市における代表的な月見松遺跡・北割・古屋敷・金鉢場・藏鹿山麓・経ヶ岳山麓・西箕輪小学校・大萱西・西箕輪養護学校・熊野神社・富士塚・在家・高根・久保田・塙畠高根・桜畠・殿屋敷・天庄・上戸・溝畠・下の原・堂洞・富士塙外・宮垣外・掘の内・上の原・小花岡・中の原・与地山寺・与地原・北方・矢塙畠・八人塙・おぐし沢・丸山清水・穴沢・ますみヶ丘・船窪・鼠平・上手原・城畠・赤坂・伊勢並・八人塙古墳・狐塙南古墳・狐塙北古墳・山の神・小黒南原・富士塙・城業・小沢原・小沢神社・月見松古墳・ウダイス原団地・上の山・高尾・鳥居原・石塙・今泉・原垣外・かんぜん・御園東部・御園南部・宮の前・清水洞・牧ヶ原・大清水・山本田代・閑畠・上溝等の遺跡が密集しており、大半は中期縄文の遺跡であるが、古墳・土師の遺跡も散在しており、考古学的研究者にとっては、垂涎の的になっている地域である。

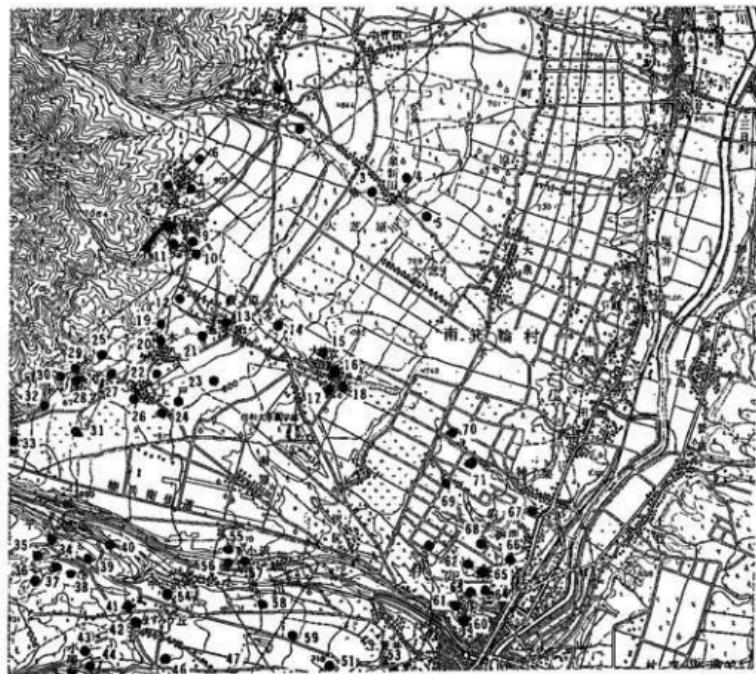


Fig. 1 財木遺跡の地形図と付近の遺跡

- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 桜 烟 | 2. 中道南 | 3. 塚烟高根 | 4. 久保田 | 5. 高 根 |
| 6. 北 割 | 7. 田 代 | 8. 猿ヶ岳山麓 | 9. 古屋敷 | 10. 金鉄場 |
| 11. 藏鹿山麓 | 12. 上 溝 | 13. 西箕輪小学校 | 14. 大萱西 | |
| 15. 西箕輪養護学校 | | 16. 熊野神社 | 17. 富士塚 | 18. 在 家 |
| 19. 駁屋敷 | 20. 天庄1 | 21. 上 戸 | 22. 天庄2 | 23. 清 烟 |
| 24. 下の原 | 25. 堂 詞 | 26. 富士塚外 | 27. 宮垣外 | 28. 番 の 内 |
| 29. 上の原 | 30. 小花岡 | 31. 中の原 | 32. 与地山寺 | 33. 与地原 |
| 34. 北 方 | 35. 矢塚烟 | 36. 八人塚 | 37. 開 烟 | 38. おぐし沢 |
| 39. 丸山清水 | 40. 穴 沢 | 41. ますみヶ丘上 | 42. 船 塚 | 43. 鼠平2 |
| 44. 鼠平1 | 45. 上手原 | 46. 城 烟 | 47. ますみヶ丘 | 48. 赤 板 |
| 49. 伊勢並 | 50. 狐塚南古墳 | 51. 狐塚北古墳 | 52. 山の神 | |
| 53. ウダイス原団地 | | 54. 小沢原 | 55. 月見松 | 56. 月見松古墳 |
| 57. 小沢神社 | 58. 城 葉 | 59. 富士塚 | 60. 高 尾 | 61. 鳥居原 |
| 62. 石 塚 | 63. 今 泉 | 64. 原垣外 | 65. かんぜん | 66. 御園東部 |
| 67. 御園南部 | 68. 宮の前 | 69. 清水洞 | 70. 牧ヶ原 | 71. 大清水 |

＊ 財木遺跡

2 遺跡の発見

財木遺跡は、早くから中期縄文遺跡として遺跡台帳に記載されていたが、後期縄文の遺跡であることが確認されたのはつい最近のことであった。

昭和51年7月1日から8月6日まで伊那市教育委員会の依頼により、月見松第三次調査の出土遺物を学生数名と羽広公民館で整理をしていた時、近所の林由明氏から20数年前リンゴの木を植えた時に畑から土器が出土しているが是非一度見てほしいとの連絡があり、ひまを見て林氏宅に遺物を見学に行つたのが7月11日のことであった。どうせ中期縄文土器であろうとかをくくつていったのだが、ほこりをかぶっていた遺物を見て驚き入ったのであった。ほとんどが後期縄文土器でその中に中期縄文土器が2、3点混じっていただけであった。早速土器の出土した地点をお尋ねし、伊那市でも後期縄文土器は稀少価値であることを説明して、遺物を拝借して水洗いし、拓本、写真をとり、資料館も出来たことなので寄贈していただくことにした。また教育委員会にも連絡し、財木遺跡は後期縄文遺跡であることを届けたわけである。

伊那市の羽広に40日近く暮らしていて、偶然后期縄文遺跡を確認出来たことは幸運であったといわねばならない。

I 調査契機とその経過

1 発掘契機

月見松遺物の土器と石器のトレスが完成したのは9月末になってからであった。図版を200枚ほど完成し、伊那市の教育委員会を訪れたのは10月のはじめであった。やっと期日に間に合いほっとしたものである。その時、財木遺跡の中央部に伊那市西部開発事業により送水管工事が行なわれ水平烟に土地改良作業が実施されるということを聞かされたわけである。春休みとか夏休みでないと調査員の学生を集めることができることを説明したのであったが、1月から工事にかかるので12月末までに調査を完了しないと遺跡が破壊されてしまうということであった。11月から12月にかけては一年中で一番日曜時間も短くあまつさえ標高900mを数える財木遺跡では、寒さのため霜柱等によって発掘調査には最も不適当な時期であることはいうまでもない。また調査員を集めるにも容易でない時期もある。しかしそんなことをいっていて稀少価値のある後期繩文遺跡が調査もせずに破壊されるのには、発見者である筆者はしのびず調査を担当することを承諾することにしたのである。

2 調査日誌

昭和51年11月20日（土）小雨後晴

新宿発10時30分駒ヶ根行に乗車、調査員は亞細亞大学の山本信男、立正大学の沢口秀館と私の3名、小野征之・今井正司は夕方車で到着の予定。新宿を出る頃は小雨であったが、甲府盆地を過ぎた頃には雨もあがりうす日がもれ出した。2時30分伊那市到着、宿舎の羽広荘に向かう。一休みしてから発掘現場と資料館の見学をする。小野・今井は8時過ぎても到着せず、9時過ぎてやっと電話連絡があり、伊那市駅に到着とのことで伊那市駅までむかえにゆく。

11月21日（日）晴

本日は日曜日なので教育委員会は休み、せっかくメンバーがそろったのに測量器財がととのっておらず測量開始が遅れる。やっと10時頃にトランシットと平板がそろい10時30分より作業開始、まず送水管の埋没される箇所に遺跡の北側から長さ20m幅5mのトレンチを設定、トレンチ内を4mづつに区切って1~10個のグリッド方式をとる。1区と2区の表土の排土作業。この箇所はどうもろこしをつくっていたらしく畑の鼠が大きく波をうっている。

本日作業終了は4時30分。夕方竹松英夫課長・小池政美の両氏と羽広荘で今後の打ち合せをする。

11月22日（月）寒さ厳しい大霜

本日の作業全員地形測量にかかる。北側の道路と東側まで測量が出来、遺跡の半分は完成。明日小野・今井が帰京するのでそれまでに地形測量を完成させるためほとんど休みなしに作業を続行し、50cmコンターを5本入れる。

作業終了は5時30分、もうあたりはうす暗くなっていた。

11月23日(火)小雪

昨日にひきつづき地形測量。本日は南東部の測量なので平板ポイントを移動、また南側に長さ60m幅4mのトレンチを設定。内部を10mずつ12区に分け、長軸を南北にし、中央で2分して、東側の北からE-1、E-2、西側の北からW-1、W-2とグリッドを設定する。午前中でグリッド設定完了。地形測量も4時頃までに完了。夕方小野・今井帰京。

11月24日(水)晴れ寒気厳しい

本日より調査員山本・沢口の2名。作業員林英雄。

Bトレンチの中央部に幅30cmのセクションベルトをテープではり、W-5区とE-6区の南側の一番低い箇所より開始。

W-5区は山本担当、この区の中央には幅1mほどの畝が東西に通じている。耕作土は25cmほどで灰黒褐色をなし、その下30cmほど掘り下げたが非常に礫が多く混在し、粘りけのある暗黄褐色をなしている。遺物は皆無であった。本日の作業は表土下40cmほどで終了。

E-6区、沢口担当。手伝い林英雄。

このグリッドも耕作土は20cmで黒褐色で、その下部は黄褐色で粘り気があって小礫及び拳大の石が多く混在している。グリッドの東南部隅を1m50cm四方を特に-50cmほど掘り下げた。早くローム層をつかみたかったからである。この箇所は土層というより小礫層といった方が適切であるかもしれない。下の方までつづいているようである。遺物は階無である。

作業終了は5時。

11月25日(木)晴。調査員山本・沢口・手伝い林英雄。

9時に作業開始

W-5区。昨日のつづき、畝の北側だけにしぶって排土作業、畝近くだけを-90cm他の箇所は-40~-50cmを掘り下げる。-25cm~-70cmまでは灰褐色の粘りの強く、礫を多少混在している層である。-70cm~-85cmは粘土質の小礫を多量に含む層である。-85cm~-90cmの層は礫まじりの水分を含む黒褐色をなし、耕作土よりやや黒味をおびている。第三層の粘土質の小礫まじりの層より土器の小破片が2点出土。

E-6区 東南隅部は20cm黒褐色の耕作土。その下50cmは灰褐色の小礫及び拳大の石が多量に混在している層で、東南隅部すなわち低い箇所にゆくほど礫・拳大の石の量が多く見受けられる。本日も遺物なし。

E-4区 本日は表土を除いただけである。

11月26日(金)晴

調査員山本・沢口、本日より信大生の手伝い東保雄・石川博・鈴木保の3名、さらに地元の手伝い林

英雄・重盛門衛・重盛直治・橋爪重男・宮下美代子の5名。

本日作業員が増加したので、E-4区とW-3区の表土除去開始。

W-3区 信大生の東・鈴木の2名が担当。発掘地点は北側でこの地区にも幅2mほどの農道が東西に走っており、農道の北側だけである。耕作土はW-5区よりやや深く、30cmを数え、深い所で45cmを算する。その下部は黄褐色の疊まじりの層で所々に拳大の石も混入していた。-40cmの小疊を含む層より土器片5点を採集した。

E-4区。耕作土は灰黒褐色で30cmを数え疊は含まれていない。その下部は小疊を含むやや明るい茶褐色の粘り気のある層が続いている。本日-75cmまで掘り下げたがこの層から土器片が数点出土している。

W-5区は北側を-70cmほど掘り下げる。耕作土の下層は灰褐色の粘り気の強い疊まじり層で遺物なし。南側も土層の変化は認められなかった。

E-6区 北側を林・南側を沢口が担当。耕作土は20cmを数えその下部は30cmほどの黒褐色の疊まじりで所々に拳大の石を含む層である。

第3層は35cmを数える灰黒褐色層、第4層は灰黒褐色をなすが拳大の石が多量に混入している層である。

本日は入手もふえたので、グリッド表土除去の作業がはかどった。E-6区は土層というよりは疊まじり、拳大の石が多量に含まれた疊層で、なにか河川の河原を感じさせる箇所である。作業終了5時。

11月27日(土)晴 調査員 山本・沢口

手伝い(信大生) 5名

地元の手伝い 5名

作業開始9時

本日新たにW-1区とE-2区にとりかかる。

W-1区(重盛直治・川口明利)

耕作土30cm、その下部は赤褐色土層が52cmづき、この層より中期縄文土器片5点出土。

本日は表土下55cmまで掘り下げただけである。

E-2区(重盛門衛・橋爪重男・宮下美代子)

耕作土は27cm~30cmほどでその下部10cmほど掘り下げたがW-1区の2層と同様赤褐色土層である。この2層より21片の土器片出土。

W-3区(鈴木保・石川博)

昨日につづき掘り下げたが第2層はまだ完全に見出すことはできなかった。この層より後期縄文土器片を7片出土。

E-4区(山本信男)

本日で当区は3日目である。耕作土は20cm~25cm、第2層は厚さ20cmで耕作土より茶褐色をなし、若干小礫を含んでいる。第3層は厚さ30cmでやや礫が少なく、この層が遺物層で北側から集中して器片が多く見られる。

W-5（鈴木保・石川博）

当区は本日で4日目である。耕作土の下は40cmの厚さの灰褐色の粘り気の強い疊まじりの層で、南側ではやや橙褐色を呈している。その下の第3層は黒褐色の泥炭層で土器片の出土が見られる。本日ではまだ泥炭層は完全に確認することはできなかった。

E-9区（沢口秀館・林秀雄・東保雄）

当区も最初から発掘開始したグリッドであるが、疊層にはばまれ、なかなかはかどらなかった。北側と南側ではセクションは大きな違いが認められ、相当あれた層であることが明白になった。北側では20cmの耕作土の下に礫を多く含む層が30cmほど堆積し、その下は灰褐色のさらさらした層が続き、その下には18cmほどの泥炭層の堆積がみとめられる。

東南隅部においては、耕作土は同様であるが、2層以下の堆積状態がやや異なっている。第2層は25cmほどの灰褐色土層でその下の第3層は疊を多量に含む灰褐色土層が40cmほどつづき、第4層は暗灰褐色が30cmほど堆積し、第5層は半大の石を多量に含む暗黒褐色土層となっている。表土下1m25cmほど掘下げたが、ローム層の存在は全く認められない。

作業終了5時

11月28日（日）晴 調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 鈴木保・川口明利・石川保・林英雄

本日の作業、人手が少なかったのでW-2区の西側とW-4区の西側に力点を置き、さらに各グリッドのセクションの整備作業を実施。

W-2区とW-4区の西側は表土を除去するだけの作業しかできなかった。W-2区は表土下30cmほど掘り下げた。表土内より3片の土器片出土。

W-4区は北側では表土下80cmまで掘り下げる。耕作土は北側で30cm、南側で20cm、第2層は灰褐色土層が20cm堆積し、その下の第3層は灰褐色の疊を含む層が30cmほど堆積している。下部はやや黄褐色をなしている。

南側は20cmの耕作土、第2層はやや粘り気のある疊まじりの灰褐色で下部はやや黄色味をおびている。作業終了5時

11月29日（月）雪後くもり 調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 林英雄・橋爪重男

本日10時頃教育長の見学

9時作業開始。本日の作業。遺跡の北側に設定したA地区のグリッドの表土除去を全員でかかる。こ

の地区はB地区と異なり、畑地として最高の土層をもつていて、ほとんど疊は含まれておらず発掘は比較的容易であった。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10 の各グリッドとも 40cm ほど表土を除去する。

4区と6区より土器の出土を見るも、この地区は比較的遺物が少ない。午前中は雪がはげしく降りつづき体を動かしていないと寒くてたまらなかった。作業終了は5時。

11月30日(火) 晴寒気厳しい

調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 東保雄・鈴木保・川口明利・石川博・林英雄・重盛門衛・重盛直治・宮下美代子

作業開始 9時

A地区のグリッドの表土除去作業完了。午後より E-2 区、E-3 区、E-6 区にかかる。

E-2 区は前日まで 40cm 剥り下げてあったがさらに 65cm まで下げる。南側より埋葬遺構発見、西側を小疊で囲み、文様からは中期初頭の土器である。この遺構は西側にも続くものと思われる所以 W-2 区も関連して耕土作業を開始する。

E-3 区も E-2 区から発見した埋葬遺構をたしかめるために耕土作業をはじめる。

W-4 区、掘りかけの耕土作業を続行する。

E-6 区は掘り下げたセクション面の整理をする。

E-2 区の埋葬遺構の発見された箇所は、耕作土の下暗褐色土層が 30cm づつき、第 3 層が小疊まじりの灰褐色土層で、周囲を探査してみたが単独の遺構と考えられる。

作業終了 5時

12月1日(水) 晴 調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 地元の人たち 4名

今日より師走、羽広にいてはその感じなし。各グリッドと早くローム層の検出に努力したが非常に深く、地元の農民の話では表土下 3m ほどあるとのことであった。ローム層が深いとなると遺構はローム面まで掘り下げておらず住居跡の発見は非常に困難であろう。

昨日埋葬遺構を発見した E-2 区の徹底した調査。埋葬を完全に検出することに全力をあげる。

W-4 区の一部に黒い落ち込みらしきものの発見、黄褐色土層の中であるため細心の注意をはらって調査を行なう。さらに数個の自然石も発見された。霜がはげしいので、むしろと天幕で覆っておくことにした。

W-4 区は出土遺物も多いので西側に少し拡張することにした。20 年前に土器が出土した地点もこの辺であるとのことであった。

一日 60cm ほど掘り下げたがまだ遺構らしきものは発見できなかった。

作業終了 4時 30 分

12月2日(木) 晴 寒気がゆるみ暖かい日である。

調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 5名

作業開始 8時30分

E-3区をE-4区と同じレベルまで掘り下げる。

W-4区の西拡張部、灰褐色の粘り気のある面まで80cmまで掘り下げたが、遺構は見当たらず、一応作業をとりやめることにした。

W-4区の北側に落ち込みらしいものが認められたが、掘り下げてゆくうちになくなってしまった。それでも一輪車によって西側に拡張する。

E-2区の埋甃は周辺調査によって住居跡内のものではなく単独の埋甃遺構であることが確認された。

W-2区をE-2区の埋甃遺構のレベルと同じに排土作業をする。ロームが深く人手が少なく作業困難であった。

作業終了 4時30分

12月3日(金) 晴寒気やわらぐ。

調査員 山本信男・沢口秀館

手伝い 信大生2名地元手伝い10名

作業内容

W-4区落ち込みを確認するため本日も排土作業続行する。

E-4区。人手が多くなったので90cmまで掘り下げる。

E-6区この地区も1m30cmまで掘り下げるも砾が多くて作業困難。

W-3区も80cmまで下げ、W-1区、E-2区も40cmまで掘り下げる。

各グリッド内における土層の堆積状態が複雑で不規則であり、何度も山くずれがあったものと推定できる。ローム層が深いため、いわゆる地山と考えられる層は黄灰褐色の疊まじり層で、遺構があるとすればこの面を切っているものと思われる。

明日の作業

E-2区の埋甃の西側セクションをとりベルトをはずす。W-4区の黒い落ち込みのセクションベルトをはずす。

E-4区はもっと掘り下げる。W-5区もE-6区も同じく掘り下げる。

作業終了 5時。

12月4日(土) 晴。

調査員 山本信男・沢口秀館(沢口は午後帰京)

手伝い 16名

作業開始 9時

W-4区の西側のセクションをとる。

E-2区の埋甃の西側のセクションをとる。その後セクションベルトをとりはずす。

E-4 区、黄色砂層まで 1m 70cm 堀り下げる。大きな自然石が見られる。

W-4 区の西側を少し拡張する。

信大生がよくやってくれたので作業が非常に進んだ。

明日の作業

W-4 区の整備と遺構の有無の確認。

E-2 区より発見された埋甕の実測。

W-1 区から W-3 区までのセクションを完了させる。E-6 区のセクションとり。

作業終了 4 時 30 分。

12月5日（日）晴 調査員 山本信男

作業員 20名

本日信大生が多数参加してくれたので仕事が進む。

E-4 区は表土下 1m 90cm まで掘り下げる。最下部は黄色砂層でまだローム層までは到達しない。北側には大きな自然石が人為的に配置されたかのような状態で出土しているが、少し深すぎるので遺構とは考え難い。

W-4 区は比較的土器片が多く出土している。ここは女子高校生に担当してもらう。

セクションは浅野明子（信大生）・村田みどり・西村節子（高校生）山本信男の調査員にかかる。W-1 区、W-2 区、W-3 区と E-6 区のセクションは完了。

E-2 区の埋甕とピットの実測、10cm 四方の水糸を張る。実測者は浅野明子と村田みどりの二人によって終了。

本日は信大生、高校生の手伝いがあり、セクション、埋甕の実測を完了させることができ幸運であった。作業終了は 4 時。

12月6日（月） 調査員 山本信男

作業員 9名

本日の作業

E-4 区のセクションの整備、2m 近く堀り下げるため作業困難。

W-5 区のセクションをとる。

W-4 区西拡張部の土器出土の多量な地区的精査。黒い落込みも残く、北側になるとなくなってしまい、ひょっとしたら住居跡かとも考えたがそうではない様子。

E-2 区の埋甕をとりあげると、1m ほどの円形のピットとなり、ピットの中に埋甕を埋置したものと考えられる。埋甕は復原可能ないわゆる中期初頭の土器である。

E-4 区のグリッドは整備が終り、明日は水糸をはってセクションをとることができる。

作業員は本日限りで終了し、明日からは、山本信男と私の 2 名だけになる。

12月7日（火）晴、最低気温で非常に寒し。

本日遺物の水洗いに3名ほど手伝いが来てくれた。

A地区のセクションを山本がとる。さらに埋甕をとりあげたピットの実測。

E-3区とE-4区のセクションとり作業、深いため非常に時間がかかった。

作業終了4時30分。

12月8日（水）晴、昨夜みぞれが降ったので一面白く、上天気。

午前中の作業、全測図に水系レベル、埋甕のピットを記入、セクション図の土層の記入。午後宮下美代子参加したので、W-4区の西拡張部の最終的な精査の結果、やはり住居跡のピットとは考えられなかつた。午後は非常に冷え込みが強い。作業終了は5時。

明日の作業、W-4区の精査と石組らしい自然石の探査をする予定。

12月9日（木）晴寒し 調査員 山本信男

作業員 信大生鈴木保・石川博・東保雄・浅野明子・宮下美代子

本日午前中だけ信大生5名の手伝いあり。

W-4区の石組の実測、どうも焼土も見当たらず炉跡とも考えられない。

E-4区の下層から顕出した石の実測、これも人工的なものとは考え難い。

土器の水洗い作業、4時30分に作業終了。

調査員が少なかったので、平板、レベル等を据えるのは一人でやり、山本信男がよく手伝ってくれてやっと財木遺跡の調査も終了することができた。

III 遺構と遺物

1 層位

発掘地点を A 地区と B 地区の二箇所にわけ、A 地区は長さ 20m 幅 5m のトレーナーを設定し 10 区のグリッドに分け、西側の 1 区、3 区、5 区、7 区、9 区のセクションを A セクションとした。

1 A セクション

本地点はよく耕作された畑であり、セクションは良好な堆積状態を示している。(Fig. 3) 耕作土が 40cm~45cm。第 2 層は茶褐色土層で厚さ 20cm、さらさらしており畑地として最高であろう。第 3 層はやや小礫まじりの茶褐色土層で、第 2 層とあまり変りないが疊を含んでいる。この層は一部 15cm ほどしか掘り下げていなかった。この A 地区は遺物の出土量が少なく、地形的に見て高い箇所にあり、ローム層まで 3m もあると聞いて発掘を中止した地区である

2 B セクション

B 地区の W-1 区、W-2 区、W-3 区の西側セクションである。(Fig. 4) この W-1 区は、北側に送水管の基本杭があるため、半分は未発掘である。耕作土はとうもろこしを栽培したため大きく波をうつており 30cm から厚い所で 50cm ほどあり、第 2 層は A セクションに見られる第 2 層よりやや黒味を帯びた暗茶褐色土層が 20cm ほど堆積し、セクションの中央で深く落ち込んでいた。第 3 層は 20cm~35cm ほどの厚さで小礫まじりの茶褐色土層がつづき、第 4 層は 15cm~35cm の疊まじりの灰褐色土層が堆積している。遺物層は第 3 層から第 4 層である。時間の都合で第 5 層までつきとめることは出来なかつた。

3. C セクション

W-4 区の西側セクションで、その西側に拡張部を設けている。(Fig. 5)

耕作土は北側で厚く 30cm を数え、南側では薄く 10cm、第 2 層が厚く疊まじりの灰黒褐色土層が 30cm~40cm 堆積している。第 3 層は茶褐色土層が続いている。第 2 層の中にブロック的に黒褐色土層が入り込んでいる。

4. D セクション (Fig. 6)

E-3 区~4 区にかけて一番深く掘り下げたグリッドである。地形的に南側に傾斜している箇所である。

耕作土は北側が厚く 35cm、南に下るにしたがって薄く 20cm ほどになる。

第 2 層は小礫を含んだ灰黒褐色土層が 30cm~20cm の厚さで堆積している。

第 3 層は北側と南側では堆積状態が異なり複雑な様相を示している。北側では、比較的厚い茶褐色土層が 65cm ほど堆積し、グリッドの中ほどにゆくとぐっと下ってしまう。南側では第 3 層に疊を含んだ灰褐色土層が 30cm ほど堆積している。第 4 層は、北側ではみられず泥炭層が 15cm から 30cm ほど

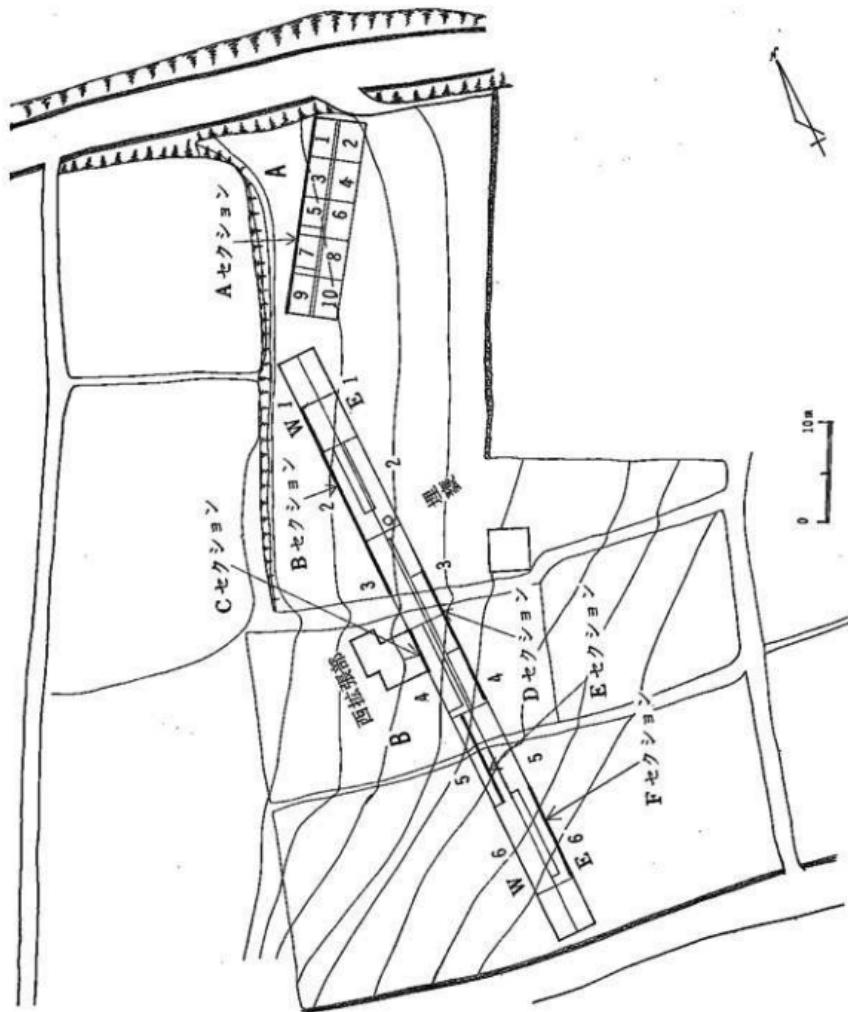


Fig. 2 脚木遺跡のクリアード敷定図



耕作土

茶褐色土層

小礫まじり茶褐色土層

無機質小礫まじり茶褐色土層

2m

0

Fig. 3



耕作土

茶褐色土層

小礫まじり茶褐色土層

無機質小礫まじり茶褐色土層

2m

0

Fig. 4



耕作土

茶褐色土層

小礫まじり茶褐色土層

無機質小礫まじり茶褐色土層

2m

0

Dセクション

Fig. 6

堆積し、その下第5層は黄褐色土層が20cmの厚さでつづき、その下に北側の第3層が落ち込んでき



Fig. 5

て、南側では第6層となっている。

北側と一番南側の一部に礫を含んだ灰黒褐色土層が見られるが中央部では認められなかった。第7層、最下部は黄褐色土層が見られ、もっと掘り下げたかったが、時間と危険性をともなうので中止することにしたグリッドである。各地で発掘をつづけてきたが、こんな層位を掘ったのははじめてで、何か獨につまれたようである。ただ泥炭層が認められることは、いつの時代にか池か沼になっていた時期

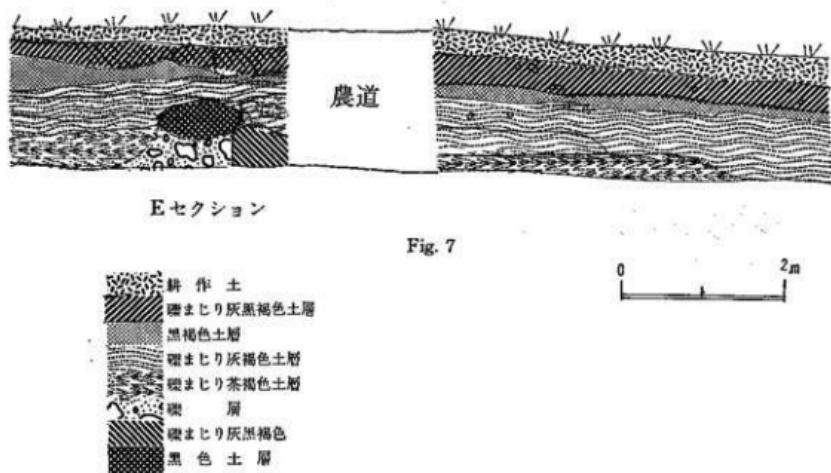


Fig. 7

があったのであろうか。遺物層は第3層でその下はすべて無遺物層である。

5. Eセクション (Fig. 7)

E-5 区の中央部のセクションで、この辺りから南にぐっと傾斜している。

土層の堆積状態は比較的ノーマルで、耕作土は 30 cm を数え、第 2 層は 35 cm の厚さで礫を含んだ灰褐色土層がつづき、第 4 層は 15 cm の黒褐色土層、第 5 層は厚く 65 cm ほど礫まじりの灰褐色土層、第 6 層は礫を含んだ茶褐色土層となっている。遺物も少なく、第 3 層より 2 片ほど採集したのみであった。

6. F セクション (Fig. 8)



Fig. 8

一番東南端の E-5 区と 6 区にかけたセクションで、発掘地点で一番低い箇所である。

非常に小砾や拳大の石の多いグリッドで発掘に手間どってしまった。

耕作土は 20 cm を数え、この中からも小砾がみられる。第 2 層は 30 cm~60 cm の礫まじりの褐色土層で、他のグリッドよりも礫の量が非常に多かった。

第 3 層北側の一部に拳大の石を含んだ茶褐色土層が見られるが、この層は他の箇所では認められなかった。グリッドの中央部に礫群ともいべきブロックが見られる。南側の第 3 層は多量に礫を含む黒褐色土層で中央部と北側では認められなかった。第 4 層は、礫まじりの泥炭層が中央部から南側にかけて認められた。最下部は泥炭層となっている。

こここの層序も非常に複雑で、また小砾、拳大の石が多量に出土し、土層というよりは、礫層といった方が正しいかも知れない。遺物は全くなし。

以上で、各地区的説明を終ることにするが、ローム層を非常に深く掘り下げる事が出来なかつたこと、特に D セクションと F セクションの堆積状態が異状な様相を示している点、もっと研究をしなければならないものと考える。

2 埋甕遺構 (Fig. 9)

財木遺跡唯一の遺構であるE-2区の南側からの、南北の径 90cm 東西径 85cm 深さ20cm ほどのビット

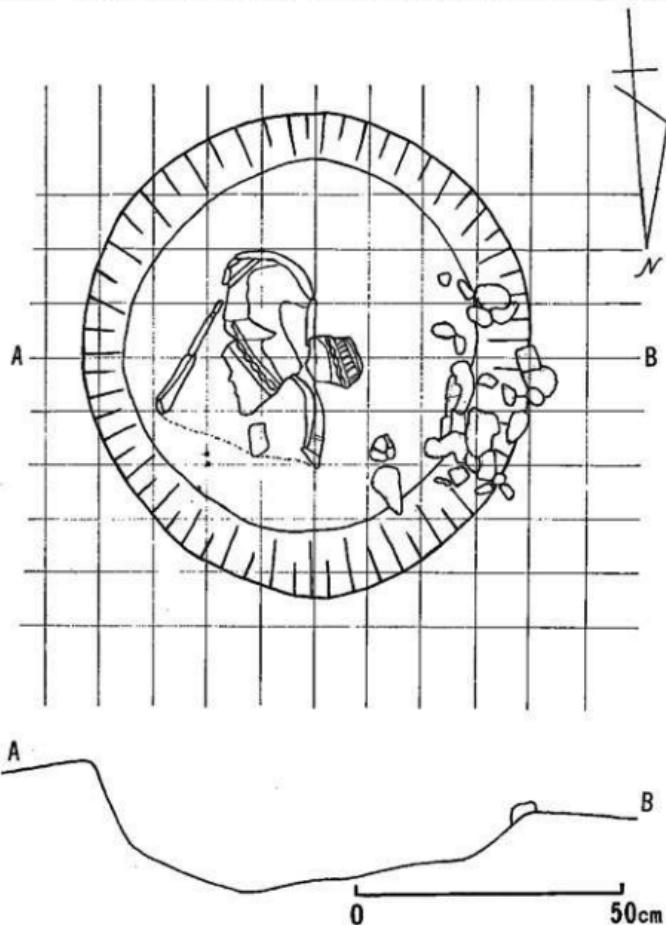


Fig. 9 埋甕遺構実測図

トの中から、口縁部を北側に底部を南にむけて横倒して鉢形土器が1点発見された。口縁部は山形をなし、胴部の中央部はややくびれている。完形に近い土器である。高さ40cm、口縁部は縦に条痕文を配し、文様と器形から判断すれば中期初頭の五領ヶ台式、梨久保式に併行するものである。

このビットが掘り込まれた層は第3層の小砾を多量に含む灰褐色土層で、遺物層は第2層の暗褐色土

層である。ピットの西側縁には傘大の石が配置され、西側が浅く、東側が深く掘り下げられている。中期初頭の土器は他からは一片も発見されておらず、ピット付近を調査した結果住居跡内部に設けられたものではない所を見ると単独の埋葬遺構と考えることができる。もし許されるならばこの遺構を中心に東西にトレーンチを設定して、調査したかったのであるが送水管の配置される幅4mにかぎられていたためそれが出来なかつたのが残念である。

3 出土遺物

遺物には、20年前に林由明氏らがリンゴの苗木を植えた時に出土したものと、今回の調査で出土したものがある。まず20年前に出土したものから説明することにする。

土器。(P.L. 1. 2. Fig. 10. 11. 12).

中期繩文土器片はP.L. 1の17~19。Fig. 10の1~2までの3片で他はすべて後期繩文土器片である。中期繩文土器は勝坂期の末葉に属するものである。後期繩文土器片はほとんどが加曾利B式併行のもので、小破片であるが鉢形をなすものが多い。ただ一片Fig. 10の11だけは縦之内Ⅱに併行するものと考えられる。P.L. 2の19~21に見られることなく底部に網代をつけたもの、P.L. 2の3. 4. Fig. 12の1, 2に見られるような注口土器の注口部も発見されている。

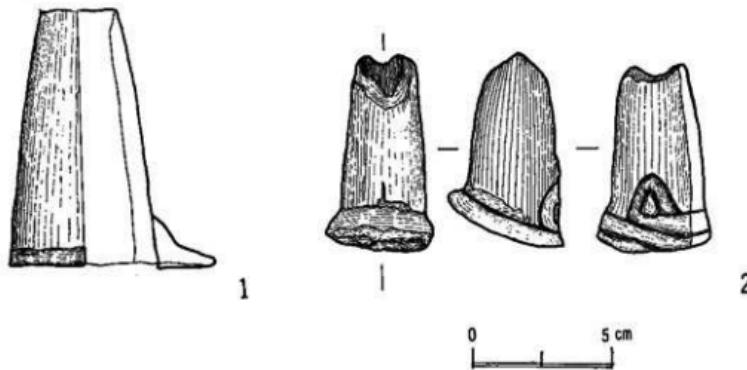


Fig. 12 注口部の実測図

出土地点は今回の調査のW-4区の西拡張部にある。前回遺物が出土した地点であるということでの拡張部を設けて調査した箇所、財木遺跡の出土遺物の一一番豊富な地点である。またP.21に示した石皿が1点が見られるが、加曾利B式にともなうものかどうかはわからない。この遺物によって財木遺跡が後期繩文器の遺跡であることを確認することが出来たのである。

さて今回の調査で出土した土器は、Fig. 13. 14. 15. 16とP.L. 4~6に見られるものである。まずA地区から見てゆくことにする。この地区は遺物が非常に少なく、出土したグリッドも4区で底一片、

Fig. 10

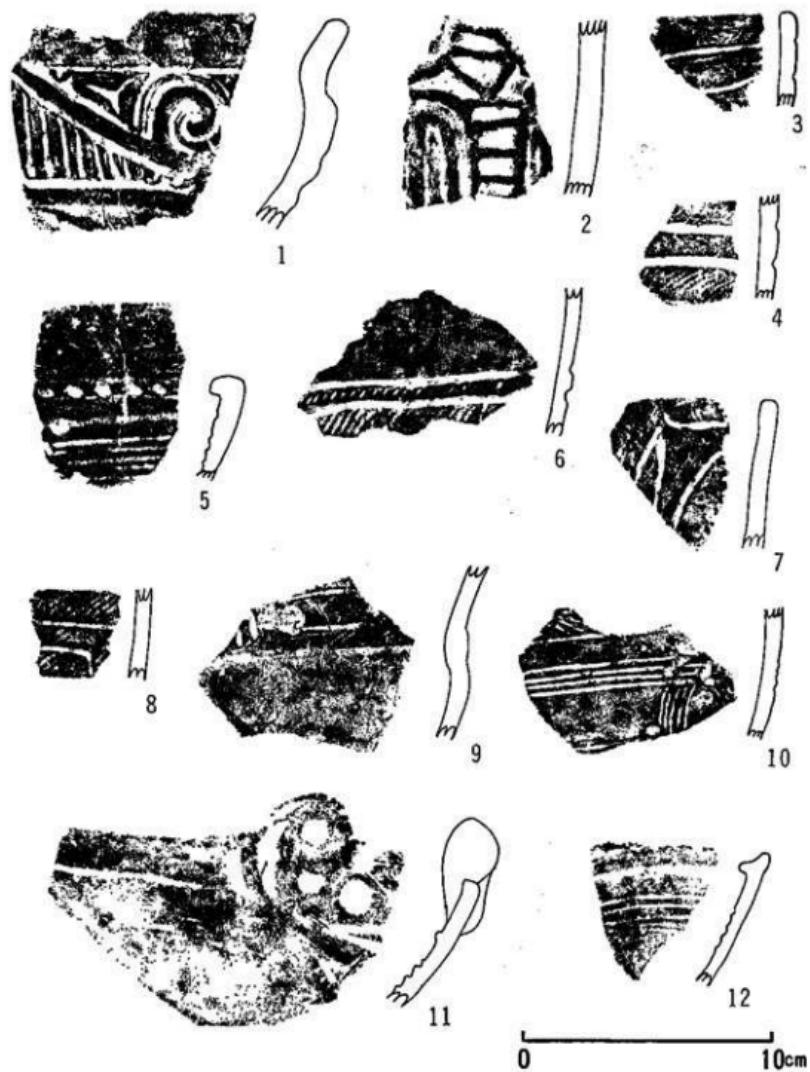


Fig. 10 土 器 拓 影 I

Fig. 11

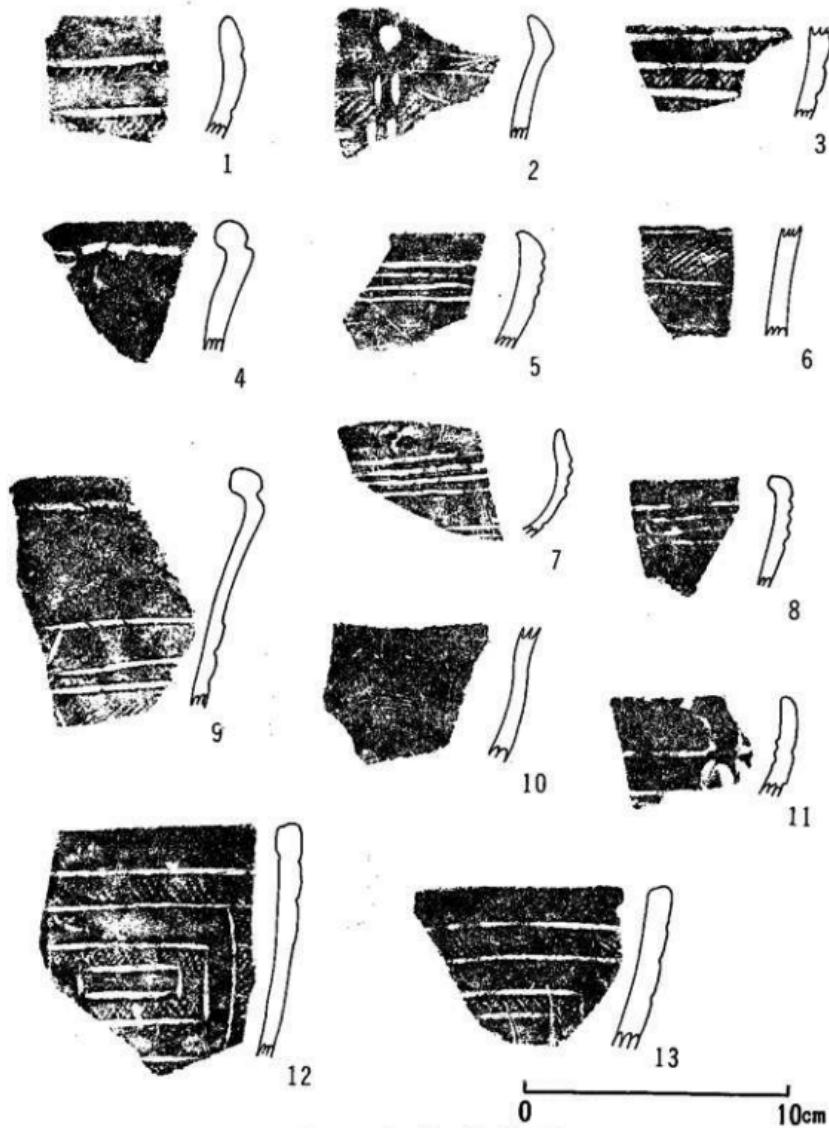
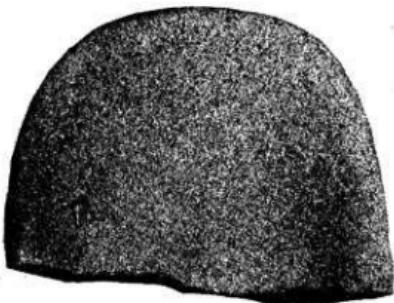


Fig. 11 土 器 拓 影 II

5区からは少破片の土器片がみられる。6区も量的に少なくP.L.3の4、5に見られる後期に属する少破片のみである。



石 III

8区からは底部の破片2点と小破片が数点出土しているがいずれも後期のものと思われる。P.L.3.とFig.13の3、18、19、20は9区出土で、Fig.3を除けばすべて中期に属するもので、Fig.13の19は有孔釦付土器の破片である。

以上がA地区出の遺物で、中期の勝坂期の破片と後期の破片が見られるが、量から見れば後期のものが大半を占めている。時期は加曾利B式併行である。

B地区

北から東側のE-2区から見てゆくこととする。P.L.4.5.6. Fig.13の17に見られるように中期の土器片も見られるが他はすべて後期繩文土器である。当地区の南側から埋甕遺構が発見されている。

E-3区からは後期の土片が数点あるだけで量的には少ない。(P.L.3の23~28)。

E-4区は後期繩文土器片に混じて中期の破片が認められるが、その量は少ない。Eグリッドの中で土器片が一番多かった箇所である。

E-6区、深の多い土層の中からたった一片P.L.3の33、Fig.13の21が見られる。中期後半のものである。流れ込んだものかもしれない。

西側のW-1区、2区、3区、5区からP.L.4に見られる小破片が出土している。いずれも後期繩文である。

W-4区の西拡張部は土器の量の著しく多い箇所で、P.L.5.6. Fig.13の12と4~16. Fig.14.15.16はすべてこの地区出土である。後期繩文の加曾利B式に併行するものである。

今回の調査で発見された唯一の石器もこのW-4区の西拡張部より凹石が出土している。P.L.7の2、Fig.16.) W-4区の西側に拡張部を設定したのは20数年前にこの辺から土器が出土したと聞いたからであり、あまりにも土器片出土の量が多いので遺構があるのではないかと思っていたが、その確認はで

Fig. 13

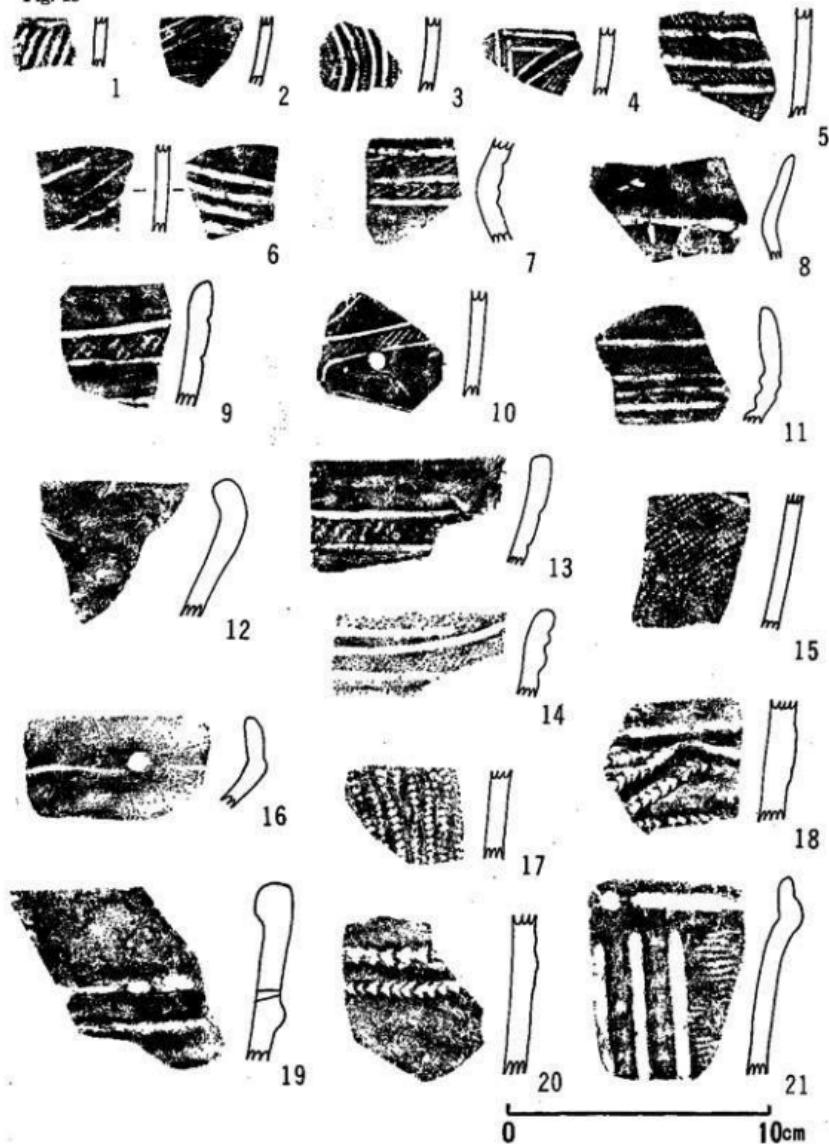


Fig. 13 土 器 拓 影 III

Fig. 14

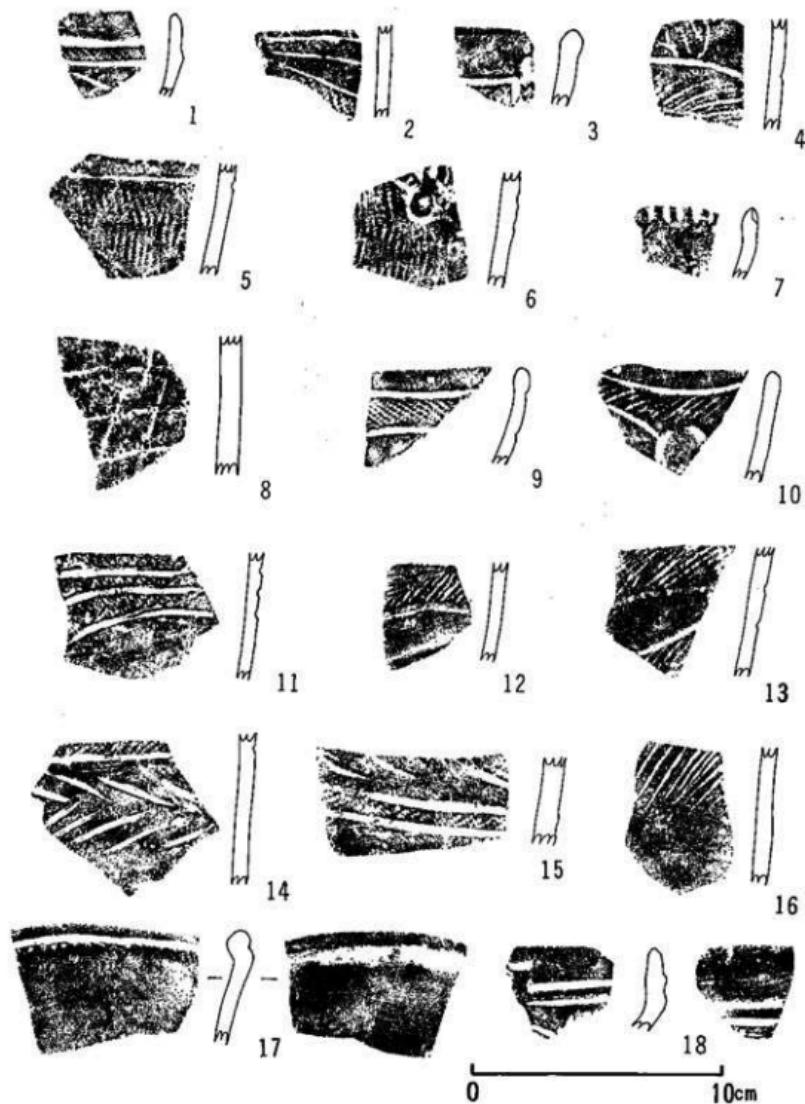


Fig. 14 土 器 拓 影 N

Fig. 15

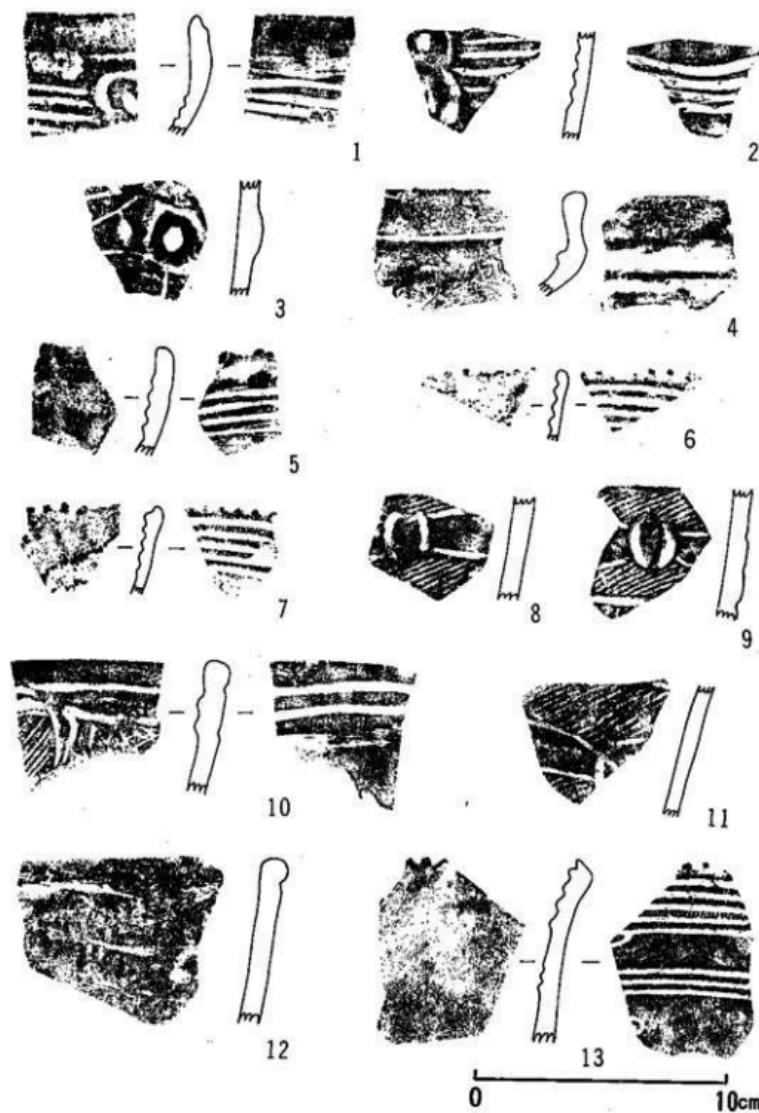


Fig. 15 土 器 拓 影 V

きなかった。もし遺構があったとしても霜林とカチカチに凍っている状態では、褐色土層中の検出は不可能であった。

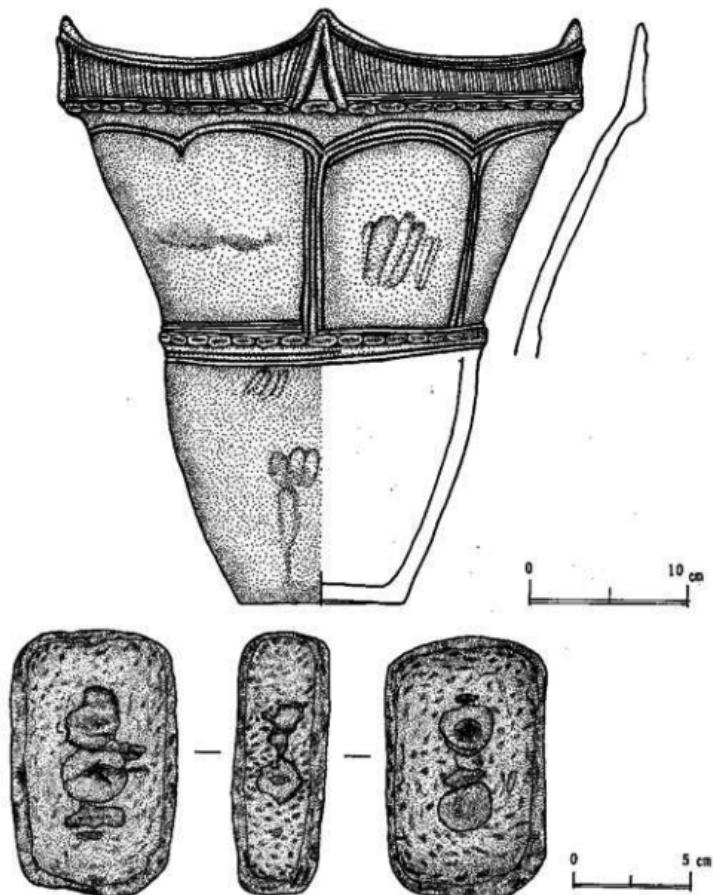


Fig. 16 埋甕土器と凹石の実測図

Fig. 16、P.L. 7 の 1 に示した深鉢形土器は埋甕を復原したものである。高さ 38cm、口径 28cm 5mm 底径 10cm 5mm を数える。口縁部は山形に 4 個小突起をつくり、半裁竹管による文様を縱に配している。その下部、胴部との境い目には細い指先による押圧文を連続させた粘土紐をめぐらしている。胴部のくびれ部にも粘土紐の押圧文が見られる。胴部上部はへら状工具による沈線を 2 条ないし 3 条、弧状に引き、ところにより胴部の中央部まで垂下させている。器形、文様構成からみて中期初頭の関東にお

ける五領ヶ台式、信州の梨久保式に併行するものである。本土器の発見されたピットの中からは他の土器片は全く認められず、よって埋甕遺構は中期初頭に位置づけることができよう。同タイプの土器は伊那においては月見松・御駿場・鳴尾天伯の各遺跡と、松本平の平出、さらに数年前整理をした神奈川の平台遺跡にも見られ関東の西南部にまで散布していることが知られる。^{注1}

IV 総 括

後期縄文遺跡である財木遺跡の調査を実施したので上伊那郡内における後期縄文文化の分布図を挙げて総括とする。

財木遺跡は中期縄文初頭、五領ヶ台式・梨久保式併行の埋甕土器1点、少量ではあるが勝坂期の破片数点、そのほとんどが後期縄文の加曾利B式併行の土器である。しかし遺構の発見ができなかつたことは残念でならない。

伊那谷における後期縄文文化の散布状態はFig 17に示したごとく、辰野町で6ヵ所、箕輪町で8ヵ所、南箕輪村で3ヵ所、高遠町で2ヵ所、伊那市で24ヵ所、宮田村で3ヵ所、駒ヶ根市で12ヵ所、飯島町で14ヵ所、中川村で1ヵ所が知られている。調査の盛んに実施されている伊那市・駒ヶ根市・飯島町から数多く発見されているのは当然であろう。それにしても中期縄文文化の末葉に見られる爆発的な遺跡の増加に比べるとその量はぐっと激減している現状をなんと解釈すべきであろうか。

関東平野に眼を転ずれば、貝塚の大半は後期縄文文化期に属している。

この現象はなんらかの条件のもとで山岳地帯より平野部に移動せざるを得なかつたためであろう。その要因はなんであったのか現在の考古学では、つきとめるすべもない。

山岳地帯に極盛を見せた中期縄文文化はその末葉まであって、それを原始農耕によって説明しようとする努力よりもなぜ後期縄文文化が減少したかをつきとめる努力が学問本来の姿ではなかろうか。いたずらに土器形式の細分だけにうつつをぬかしては社会の復原はできないであろう。

P.L. 4 の 32 に示したごとく財木遺跡からたった1点灰釉の破片が発見されており、必ず近くに灰釉を出土する平安時代の遺跡が存在することはたしかで、とくに近くにある中仙寺との関係を考える上で注目すべきであろう。

財木遺跡も、もっと広範囲の調査が可能であったならばもう少し財木遺跡の特色を把握することもできたであろうが、行政発掘のためそれができなかつたことは残念であった。

Fig. 17 上伊那郡における後期縄文文化の分布図



I 長野町	III 南箕輪村	VII 岩島町
1. 出の沢口	15. 大芝原	44. 真米
2. 宮の前	16. 北高根A	45. 南割田中
3. 檜の木	17. 宮の上	46. 西原
4. 牧垣外		VII 駒ヶ根
5. 上の原	IV 高遠町	47. 上の原
6. 榎沢山麓	18. 下山田竹垣外	48. 中割原
	19. 河南八幡原	49. 舟山
II 箕輪町		50. 佐衛門分
7. 長田	V 伊那市	51. 十二天
8. 大原	20. 琴畑	52. 大仙原北
9. 一の宮A	21. 財木	53. 駒ヶ根工場
10. 上の林	22. 宮垣外	54. 平林
11. 久保田下	23. 小花岡	55. 大徳原南B
12. 上の平	24. 宮の前	56. 大原
13. 矢田尻	25. 今泉	57. 汗沢
14. 卯の木	26. 城樂	58. 馬住原
	27. 伊勢並	VII 宮田村
		IX 中川村
		73. 大草北組

おわりに

財木遺跡の調査は土地改良にもとづく送水管を設定する幅5mに限られた範囲で南北にしか調査が出来ず、あまつさえ11月から12月にかけての晩秋で、考古学の野外調査では最悪な条件でやらねばなりませんでした。

それにもかかわらず伊那市の教育長はじめ教育委員会の皆さんの援助と調査員、地元住民及び信大生の絶大な協力が得られたので調査も無事終了することが出来ましたことは感謝に堪えません。

遺構としては埋甕がたった一基しか発見できず、伊那地方でも貴重な後期繩文文化の遺跡でありながら遺構の発見が出来なかったことは責任者として恥愧に堪えない次第です。財木遺跡は西側が山裾に面しているため高く、南東部に傾斜している地形で、発掘地点のB地区特にE-5区、E-6区、W-5区は土層の堆積が複雑がありました。E-5区とE-6区にかけて認められた泥炭層の堆積は沼があるいは湿地帯を形成していた時期があったのではないかと思われ、遺跡の南側を東西に走っている農道は付近で一番低い所で川底とも考えられ、昔は流れが東流していたと、またE-6区付近は河原であったであろうと推測されます。

発掘結果、財木遺跡からは中期繩文文化期の初頭にあたる土器が1点出土していますが、中期繩文土器片は出土量が少なく、9割は後期繩文土器で必ず近くに集落がつくられていたことは疑いないものと思われます。今後良好な条件で調査ができるならば是非もう一度調査したい遺跡あります。

最後に寒さきびしい時期の調査でしたが毎日地主の林由明氏宅で、昼食のとき温かいみそ汁など心のこもったおもてなしを受け調査員一同心から感激しております。責任者として調査員を代表してお礼申し上げる次第です。

1977年3月

早春の生田で

上川名 昭

注1.

神奈川県二宮町 平台遺跡とその出土遺物 P15~P18. 上川名 昭.

調査団

団長 上川名昭

調査員 小野征之、今井正司、山本信男、沢口秀館

作業員

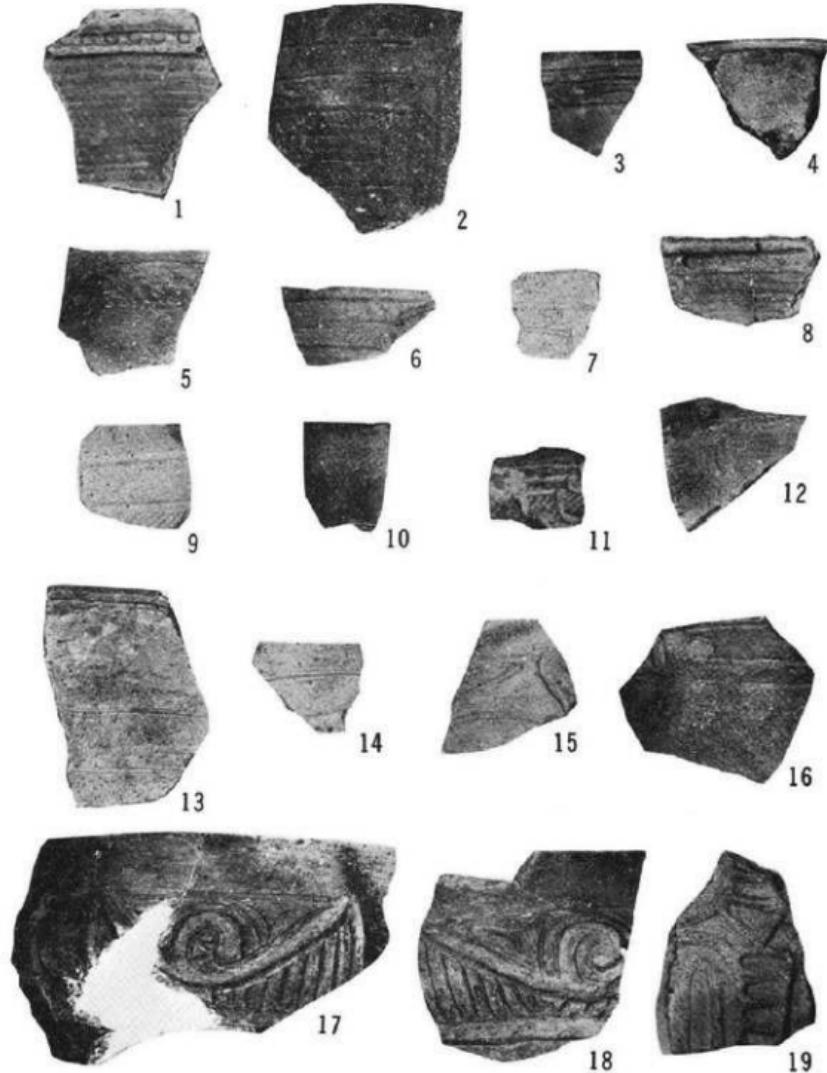
(地元の人) 林英雄、重盛直治、重盛門衛、宮下美代子、橋爪重男、中村恭子

(信大生) 鈴木保、石川準、東保雄 川口明利、大槻清隆、竹田義、弓場昭男、棚垣外健、

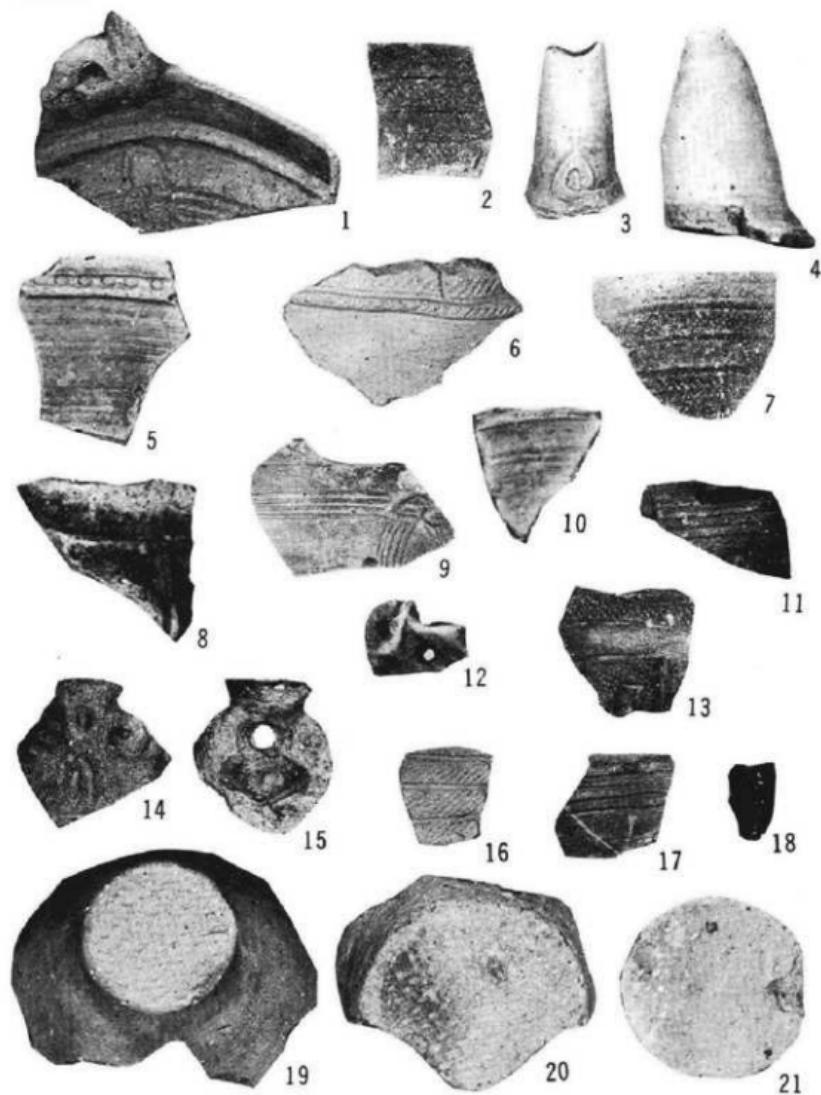
港和行、椿知雄、没野明子、河野正美、本多道明、日置康博、中井清人、金子裕明、古井亮治、三島誠

(高校生) 村田みどり、西村節子、重盛みどり、青木公子、小林香代子、小坂祐子

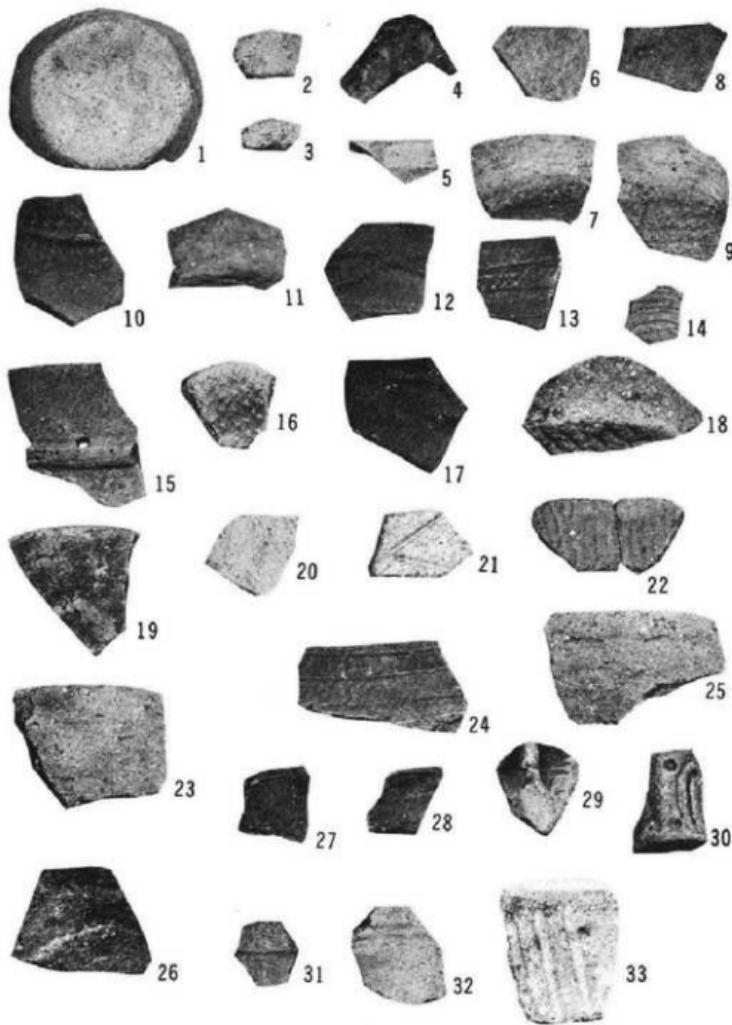
P. L. 1



P.L. 2

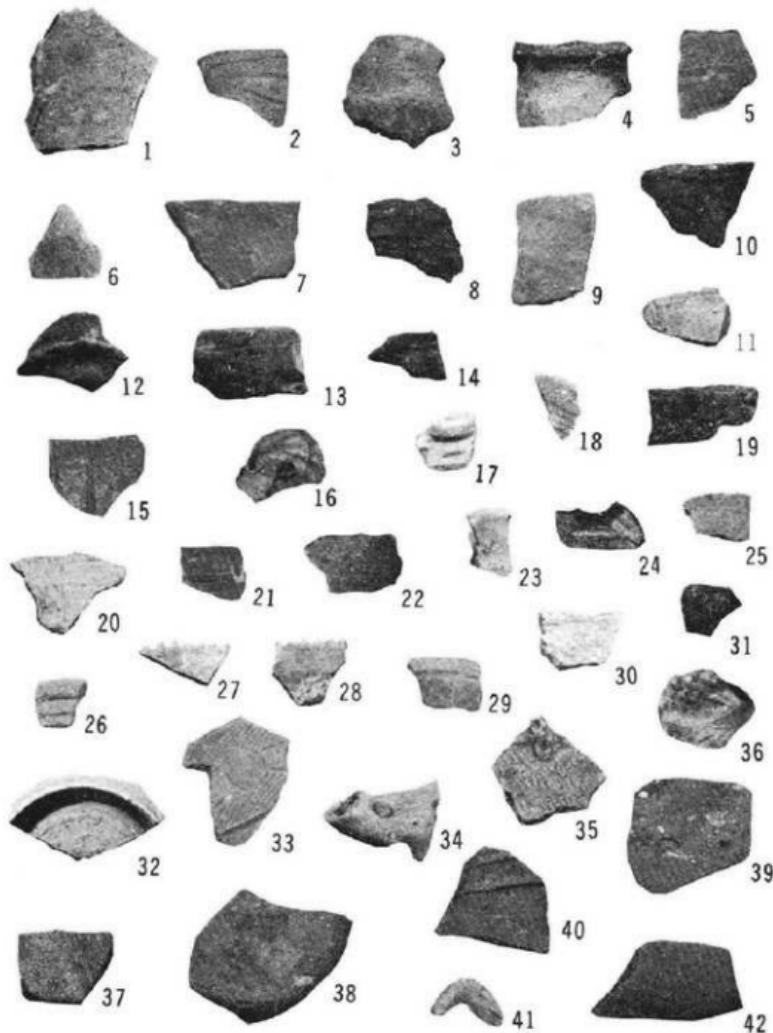


P.L.3



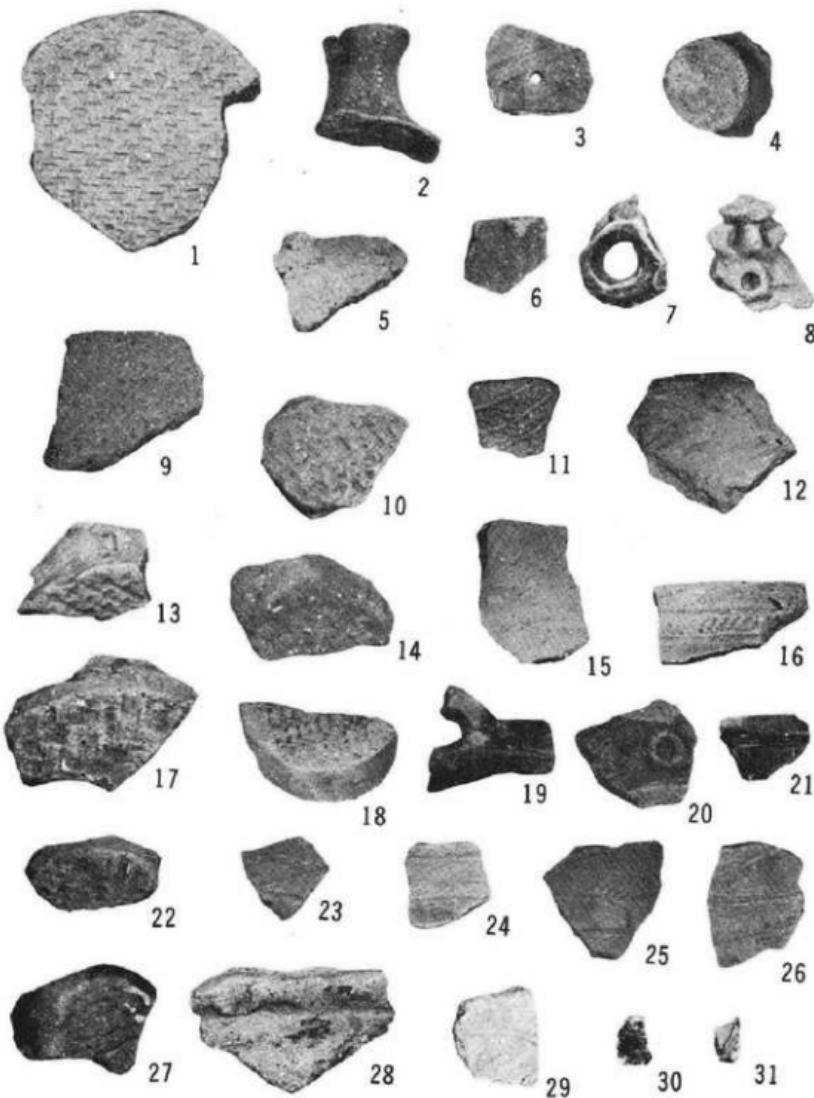
A地区 1.4区、2.3.5区、4.5.6区、6~9.8区、10~15.9区、16~22 E-2区、
23~28 E-3区、29~32 E-4区、33 E-6区

P.L.4



1~36 W-4 区、西擴張。37 W-1 区、38 W-2区、39 W-5 区、40~42 W-3 区、32 は灰釉

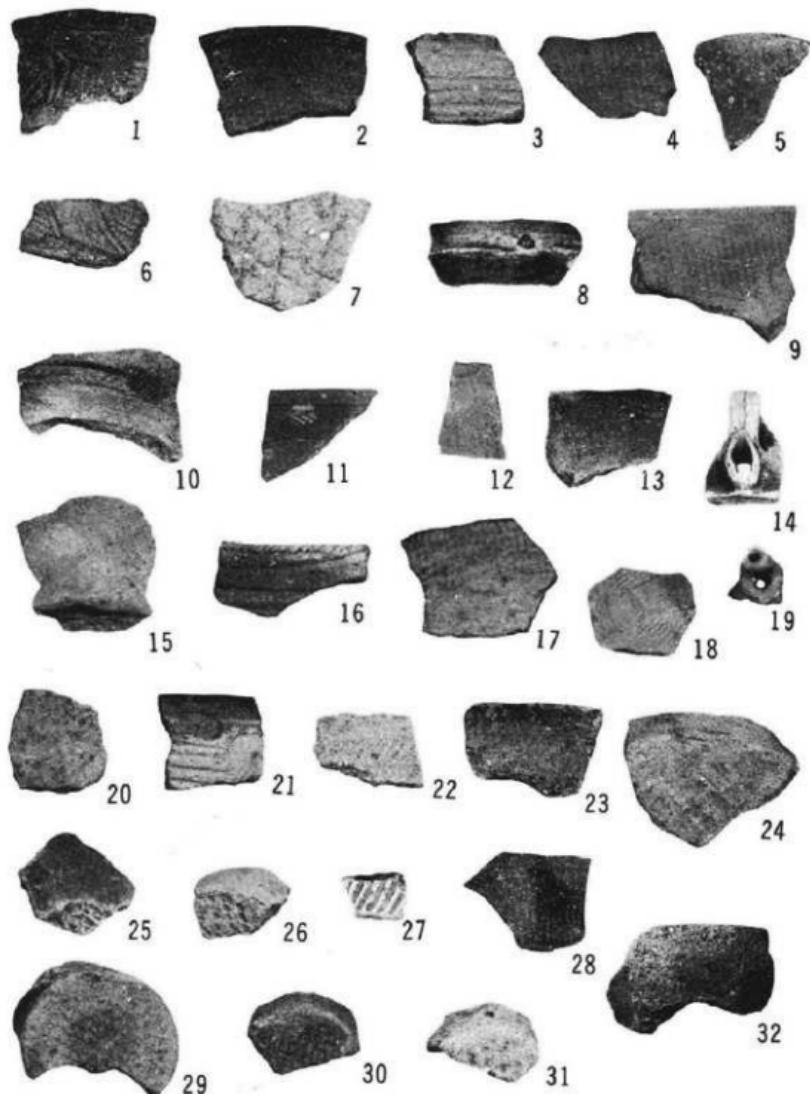
P.L.5



B 地区

W-4 区

P.L.6



B 地区 W-4 区



1



2

1. 埋甕土器 2. 四石



1. E-4区のセタシヨク、中間に隕星層がみられる



2. E-6区の複雑なセドメント

P.L.9



南側よりB地区グリッド全景



B地区グリッド設定

P.L.10



A 地区の発掘風景



B 地区の発掘風景

P.L.11

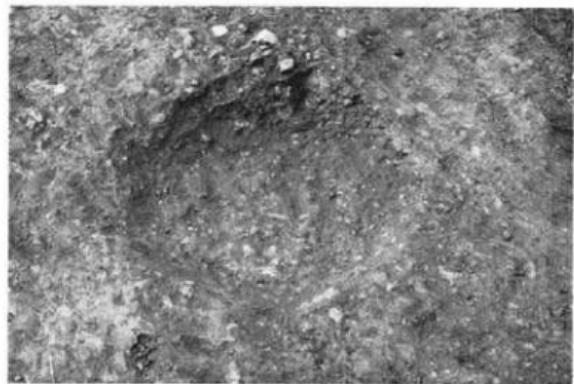


E-3区の発掘状況

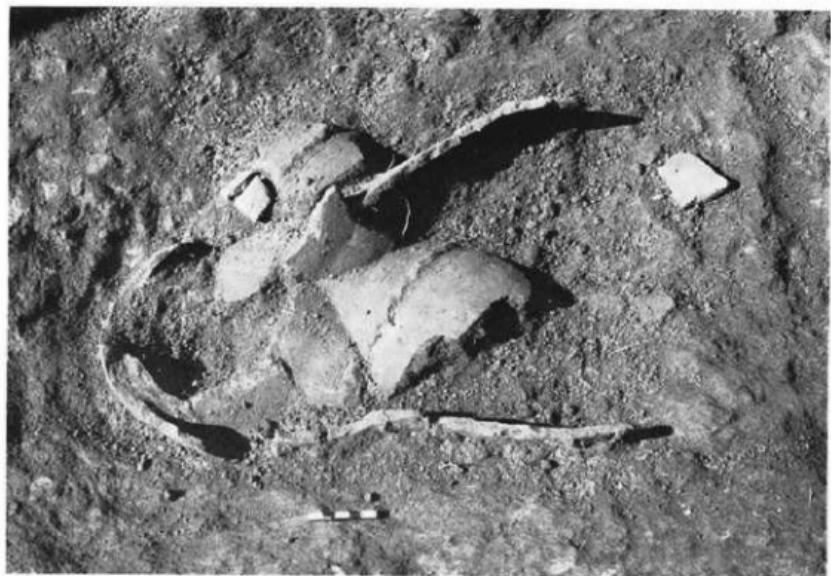


W-4区の西拡張部

P.L.12



埋薬をとりのぞいたあとのビット



埋
薬

P.L.13



E-3 区・4 区



E-2 区の埋甃と E-3 区の発掘状況



W-1区のセクション実測



W-4区の西拡張部の発掘状況

P.L.15



埋糞とセクション実測風景



記念撮影

財木遺跡
ZAIMOKU SITE

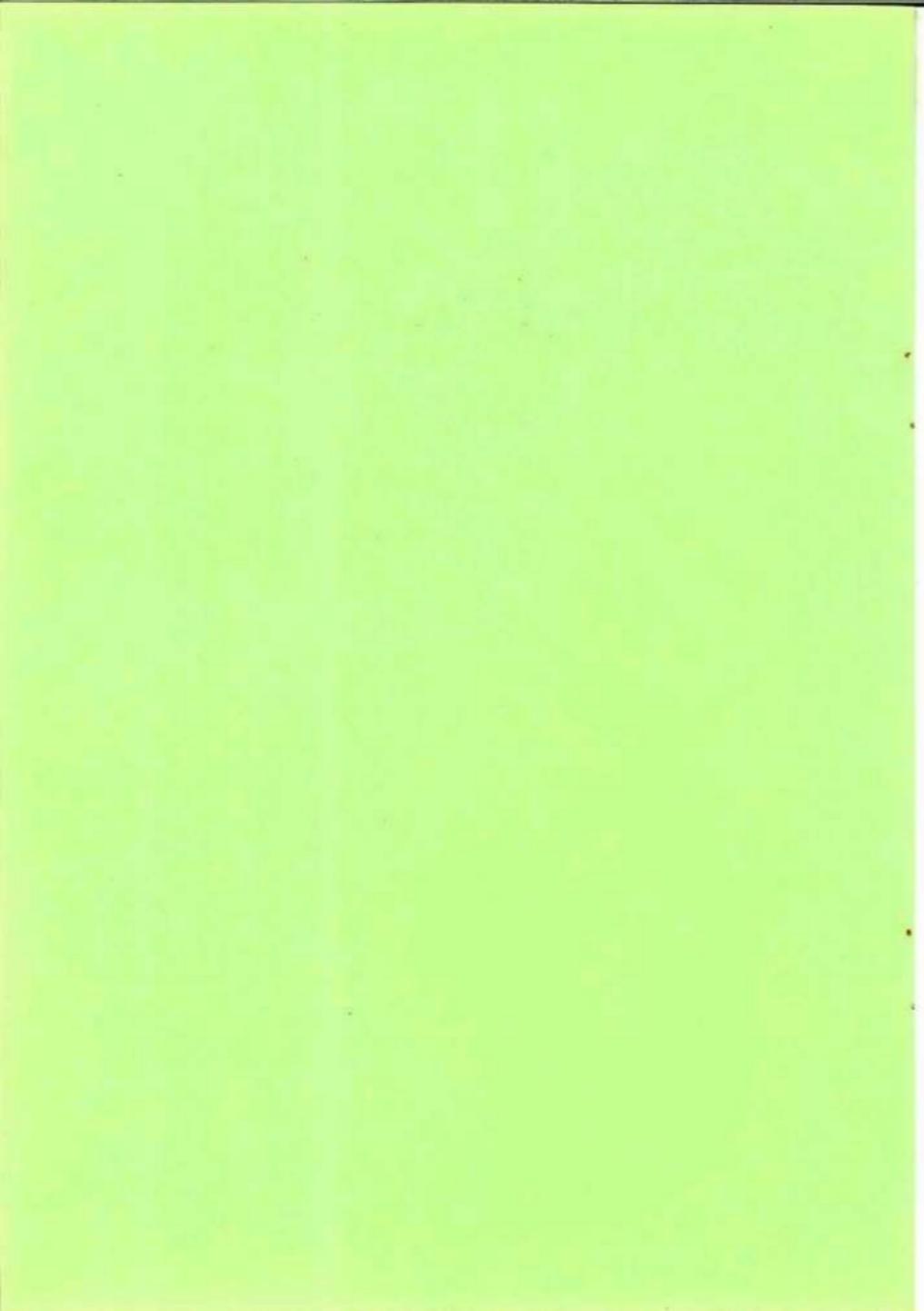
1977年3月20日印刷
3月25日発行

編著者 上川名 昭

発行者 伊那市教育委員会
伊那市通町3388の2

印刷所 中央印刷株式会社
岡谷市川岸108

金 鑄 場 遺 跡



凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴う、西部送水管工事事業で、第2次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、西部送水管工事事業に伴なう緊急発掘で、事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美

◎図版作製者

◎地形測量

小池政美・田畠辰雄

◎写真撮影

◎発掘及び全景

小池政美・田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

凡 例.....	(3)
目 次.....	(4)
挿図目次.....	(4)
図版目次.....	(4)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(5~6)
第1節 発掘調査の経緯.....	(5)
第2節 調査の組織.....	(5~6)
第3節 発掘日誌	(6)
第Ⅱ章 遺構・遺物.....	(6~7)
第1節 遺 構.....	(6)
第2節 遺 物.....	(6~7)
第Ⅲ章 ま と め.....	(7)
挿図目次	
第1図 地形図.....	(8)
第2図 グリッド配置図.....	(8)
図版目次	
図版1 遺跡全景	
図版2 発掘風景	

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区（天竜川の西側地区を標示している）に送水管を農林省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市に於いては、西箕輪・伊那・西春近地区がこれに該当し、本年度は昭和50年度に実施した西箕輪大泉新田塚畠遺跡に続く調査として、西箕輪羽広金鉄場遺跡があたるということで、発掘調査を実施するようになった。

関東農政局伊那西部農業水利事業所長と伊那市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備に着手した。

第2節 調査の組織

金鉄場遺跡発掘調査会

調査委員会

委 員 長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副 委 員 長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	米山 博章	" 係長
"	小池 政美	" 主事
"	三沢真知子	" 主事

発掘調査団

団長 上川名 昭 玉川大学助教授（日本考古学协会会员）

調査員 小池 政美 伊那市教育委員会（長野県考古学会会员）

〃 田畠 氏雄 〃 （ 〃 ）

第3節 発掘日誌

12月21日 発掘器材を伊那市西箕輪羽広に所在する遺跡地へ運搬しておく。さらに、明日よりの作業の都合を考慮に入れておいて、グリッドを設定した。グリッドは遺跡地が桑畠であったためにトレンチ状に設定した。それらの内訳は西側からA・B・Cと、北側から南へ1~12区とそれぞれ決めた。長さによって、多少の区のずれがあり、Aでは10区、Bでは12区、Cでは11区であった。それらの区は全て、幅1m、長さ2m、したがって、面積は2m²となった。

12月22日 昨日、設定したグリッドに従って発掘作業を進めていくが、遺物の出土は少量の織文中期土器、須恵器片、土師器片であった。土層は耕作土、褐色土、砂礫混りの黄褐色土であった。特に、第3層となる黄褐色土は真山の押し出しによる堆積と断定できた。 （小池政美）

第Ⅱ章 遺構遺物

第1節 遺構

今回発掘された西部用水管用地内では、遺構の存在は全くなかった。しかし、もう少し広範囲での調査がなされたならば、遺構の可能性は強いものと思われる。その理由としては、少量ではあるが、遺物の出土があったことが重要な手掛りとなろう。また、遺構の掘り込んだ土層は第3層の砂礫混りの黄褐色土の堆積土の下層土層面を掘り込んでいる可能性も考えられる。

第2節 遺物

今回出土した遺物は少量であった。磨耗が著しかったために拓影及び実測図による説明は割愛させていただいた。遺物としては織文中期土器片、縄年でいう加曾利E式、須恵器片（須恵器Ⅲ式）土師器片

(国分式) であった。石器の出土は 1 点もなかった。

(小池政美)

第Ⅲ章 ま　と　め

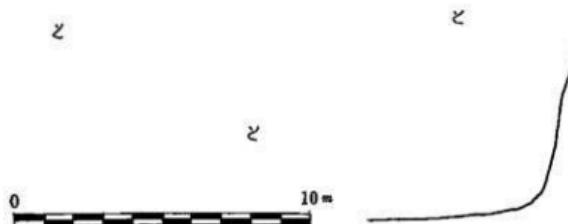
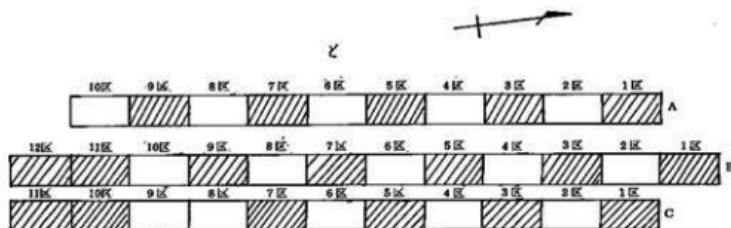
金鉄場遺跡は経ヶ岳山麓の押し出しによる堆積土の厚いこと、また、西都送水管用地内という限られた地区だったこと、これらの二つの規制された条件によったために結果的には、遺構が全く検出されないというさびしいものであった。

遺物についてもみじめな状態で、内容的については第 2 節・遺物で触れたとおりであった。金鉄場は古くより、仲仙寺の梵鐘を鋳た場所として伝承されているが、その事実を確証づけできるような遺物は何も出土しなかった。ただ、このことも前述した二つの条件を参考にして考えてみるべきことは当然と思われる。

(小池政美)



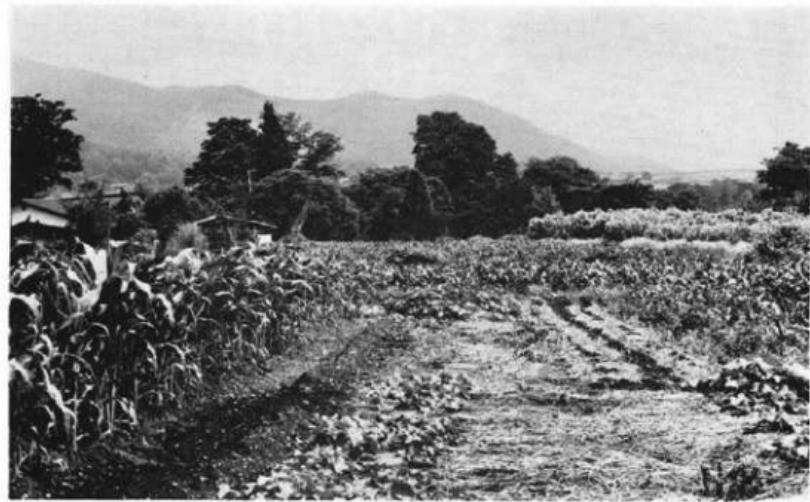
第1図 地形図



第2図 グリッド配置図



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を南側より眺む
図版1 遺跡全景



グリット掘り(その1)



グリット掘り(その2)

図版2 発掘風景

金鋸場遺跡緊急発掘調査報告書

昭和52年3月20日 印刷

昭和52年3月25日 発行

発行所 伊那市教育委員会

岡谷市川岸108

印刷所 中央印刷株式会社

